アウグスブルク滞在記／国際交流事業への協力

氏名：中村 倖

滞在期間：令和８年８月 29 日～９月７日（アウグスブルク滞在：８月 30 日～９月６日）

１．はじめに

このプログラムに参加するまで、私は単なる姉妹都市としてアウグスブルク市の存在は認識していても、実際にどういった土地で、どのような暮らしが営まれているのか、全く知ることがなかった。そこで今回の滞在は、私の知見が大きく広がる機会となったと同時に、地元長浜に対しても提案ができるような学びをもたらしてくれた。

滞在直前には、英語（ドイツ語）でのコミュニケーションに不安を抱くこともあったが、現地の方々の優しさに支えられ、非常に有意義な一週間を過ごすことができた。

２．滞在中の印象に残った出来事

①姉妹都市としてのつながり・歓迎

プログラム全体を通して、アウグスブルク市と長浜市との古くからのつながりの深さや、アウグスブルクの人々の姉妹都市提携を重んじる姿勢に心を動かされた。



◀「長浜大通り」の標識を指さす長浜の団員たち

２日目に訪れた「長浜大通り」は姉妹都市提携を記念して２００４年に命名されたものである。また、同日見学したアウグスブルク植物園には日本庭園が設置されている。数年に一度、日本から庭師がやってきて手入れを行うそうだが、普段は現地の職員の皆さんが管理している。現地特有の気候・文化に合わせるため日本の一般的な庭園とは異なる点もあるというが、基本的には日本の庭師からの指示を忠実に守りながら手入れされているのだと聞いた。それらの指示はとても細かく、再現するには難しいものもあるという。印象に残っているのは、園長さんはその細やかな気配りの有無によって生まれる差に驚いたと同時に、深く感銘を受けたとおっしゃっていたことだった。日本文化の魅力を普及する手段として、非常に良いかたちが形成されていると思った。



▶植物園の日本庭園の一角。よく手入れされ、美しい風景が保たれていた

また、同日の午後にはアウグスブルク市内を散策した。当初のプログラムでは、工事中のため市庁舎の「黄金の間」には立ち入れないことになっていたが、工程がほぼ完了していたこともあり、アウグスブルク市職員のみなさんのご厚意によって特別に見学することができた。３６０度どこを見渡しても豪華絢爛な装飾に圧倒されたのはもちろんだが、特例として我々に公開してくださったことから市職員のみなさんが姉妹都市として長浜市および尼崎市を大事に思っていることが伝わり、感激した。

②　歴史と平和

滞在中は街中を散策する機会も多かったが、歴史を感じさせる建物が多く立ち並び、現地の雰囲気を肌で感じることができた。ドイツは日本に比べて地震が少ないということもあり、ノイシュヴァンシュタイン城やヴィース教会など、何百年も前の建物が今もほぼそのまま残されている。そういった場所は観光資源として活用され、国内外から多くの人を惹きつけていた。

また、建築物の保存という観点以外からも、アウグスブルクおよびドイツの歴史の深さを感じるこ

とができた。たとえば、フッゲライでは500年前と変わらない家賃で人々が暮らしを営んでおり、その規則も設立当時とほとんど変わらない。第二次世界大戦で一度焼失してしまった建物も多いというが、実際に過去に使われていた家具や日用品を目にし、フッゲライで脈々と受け継がれてきた制度や支援の温かみを感じた。



◀いくつもの部屋が並ぶ、晴天の下のフッゲライ

特に印象深かったのは、ダッハウ強制収容所記念館でのガイドツアーだ。第二次世界大戦当時のドイツでのナチスによる独裁政治の歴史についてはなんとなく知っていたつもりだったが、現地に赴き説明を受けることで、ぐっと理解を深めることができた。敗戦後、衛生面と罪の意識から、当収容所の宿舎はすべてが取り壊され、収容された人々が着ていた制服もほとんどが燃やされて残っていなかったという。そんな中で自国民の強制労働という黒い歴史を広く公開することに対しては、ダッハウの人々からの反発も大きかったと聞いた。それを乗り越えて負の遺産を伝える記念館が開かれたのは、確かに現地の人々からすれば誇れることではないかもしれないが、こうして異国の地からやってきた我々も平和への願いを深めることができるのは価値ある体験だと思った。



▶収容所記念館の見学は、非常に有意義なものとなった

③自然・風景

一週間の滞在の中でも思い出深く記憶に残っているのは、広大な土地に広がる豊かな自然である。日本に比べると国土面積が格段に広いこともあり、市の中心部であっても木々が植えられているのを多く目にしたほか、どこかゆとりのある都市設計の様子がうかがえた。

また、ホームステイ先と集合場所/解散場所との間の道のりでは、なだらかな丘とそこに青々と茂る牧草を見ることができ、毎朝毎夕新鮮な感動を覚えた。ふと目をやると牛や馬、鶏などが放牧されている光景はなかなか日本では目にすることができない。馬は草地の管理のため放し飼いされているといい、化学肥料に頼らないという環境意識の高さを実感した。また、フュッセン地方に向かう道中では、乳牛たちが牧草を食べながらのびのびと過ごしている様子を見て、アニマルウェルフェアに配慮した飼育法が実践されていると思った。もちろん、これらは環境や動物福祉を重んじて最近始まった試みではなく、むしろ気候や土壌に適するスタイルとして古くから受け継がれてきたものである。そうした昔ながらの飼育法が結果として倫理的にも優れた手段であるというのは、理想的なことであると考えた。





◀ホストファミリー宅近くで飼育されていた乳牛（左）と馬たち（右）

④　フェアウェルパーティー・日本文化の紹介

フェアウェルパーティーでは、アウグスブルク市と長浜市の比較クイズ、福笑い、日本語での名前カードのプレゼントを行った。基本的に進行は英語で行ったのだが、拙い発音だったにもかかわらず

ホストファミリーはよく準備された出し物でとても楽しめた、と言ってくれてうれしかった。私は福笑いを担当したが、おそるおそるパーツを配置し、完成形を見て笑顔になるアウグスブルクの人々をみて心が温まるとともに、日本文化の普及に貢献できた達成感でいっぱいになった。



◀福笑い体験の様子。存分に楽しんでもらえたと思う

3．ホストファミリーとの交流

私にとっては今回が初めてのホームステイで、ただでさえ英語で話すことは苦手なのに、母語が英語ではない人々とのコミュニケーションが成立するのか不安な部分もあったが、初日に笑顔で温かく出迎えてくれたホストマザーとホストシスターの姿には安堵を覚えた。家に到着し、日本からのお土産を手渡すととても喜んでくれ、私もうれしい気持ちになった。特に、事前にメールでリクエストされていたチョコレート菓子、メルティキッスは通常ならば冬季限定販売のところを偶然近所のスーパーで発見し、溶けないよう注意しながら持ってきたものだったので、きらきらと目を輝かせて受け取ってくれたホストマザーの笑顔は記憶に残っている。

滞在中、ホストファミリーは常に私のことを気にかけてくれ、一週間居心地よく過ごせるよう尽くしてくれた。



▶フェアウェルパーティーにて、ホストファミリーとの一枚

ホストマザーは都合のいい食事や洗濯のタイミングを尋ね、サポートしてくれた。

流ちょうな英語を操り、時には父母と私の間の通訳としてコミュニケーションを図ってくれたホストシスターには頭が上がらない。毎晩帰宅すると疲れていないか尋ね、もしよければカードゲームをしようと誘ってくれたことがうれしかったと同時に、同い年とは思えない英語力と気配りに尊敬さえ覚えた。生き物が好きという共通点で意気投合し、ペットのモルモットを撫でたり、カエルをモチーフにした雑貨を手に取って愛でたりする時間を通じて言語の壁を越えた意思疎通ができたような気がした。

ホストファザーはサービス精神旺盛で、いつも笑顔でドイツにまつわるいろいろな知識を教えてくれた。送迎を担当してくれたのは主に彼だったのだが、その間絶えず日本での生活について尋ねたり、車窓からの風景について教えたりしてくれて、おかげで緊張がぐっとほぐれたように思う。そういった朗らかさのおかげで、2 回目以降の送迎ではもともと興味を抱いていた農業や交通事情について自分から質問することも多くなり、たくさんのことを学べた。団員のなかでも私のホームステイ先は郊外の、市中心部からは離れた場所に位置しており、移動時間は比較的長いほうだったが、車中では風景を眺めながらコミュニケーションを楽しむことができ、とても良い思い出になっている。

私がこの滞在中重大な体調不良もなく楽しみながら過ごせたのは、まごうことなくホストファミリーのおかげだ。最終日は、ホストファミリーやアウグスブルク市の美しい街並み・風景に別れを告げるのが惜しく、思わず涙を流した。一週間という短い期間ではあったが、ここまで人を惹きつけ、愛着を持たせるアウグスブルク市、そしてアウグスブルクの人々の魅力ははかりしれないと思う。



◀最終日、涙した私を見守ってくれたホストファミリー

4．滞在を通じて感じたこと（日本・長浜との比較）

ホストファミリーやアウグスブルク市職員のみなさんのサポートもあってか、文化面で日本とのギ

ャップに大きく苦しむような場面はなく、楽しみながら一週間を過ごせた。とはいえ、日本と違いを感じる場面は少なくなかった。

毎日のレストランでの昼食は格段にボリュームが多く、脂質が多いことも相まって食べきれないことも多々あった。しかしどの料理も味付けはとてもおいしく、今まで感じたことのない味わいに団員どうし盛り上がったのをよく覚えている。

コミュニケーションを通して、教育面でも日本との差を顕著に感じた。ホストシスターの英語力の高さに驚いたのはもちろんだが、ホストマザー・ホストファザーも難なく英語を使いこなしていて、私よりも流ちょうなほどだった。日本では、親世代に当たる 40～50 代で日常英会話を使える人は多くない印象だ。ドイツにおける英語教育の普及率は、日本に比べてずっと高いのだと感じた。

また、様々な施設を訪問し、人々の自立を支えるしくみが充実していると感じた。今回訪れたフッゲライ、グランドホテル・コスモポリス、聖エリザベス職業訓練センターなどの施設は、どれも社会的に弱い立場にある人をサポートする場所だった。いずれの施設にも共通して特徴的だったのは、民間によって運営されていることと、あくまでサービスを受ける人々の自主性や適性が重んじられていた点だった。無理に一つの型にはめて自立を強制するのではなく、ゆるやかに社会的コミュニティの輪に加わることを後押しするような姿勢は、日本ではあまり見ることのないような気がした。

５．長浜市の国際交流事業に協力できること（したいこと）

(1) 滞在を通じて心に残ったこと

ここまで、様々な観点から日本とドイツとの違いについて書いてきたが、やはり印象に残っているのは人々の温かみと豊かな自然である。

アウグスブルクの人々が気さくに接してくださったおかげで緊張がほぐれ、滞在を存分に楽しむことができたとしみじみ思う。また、現地の人々からきくアウグスブルクの魅力は、インターネットで入手する情報よりも輝きをもってきこえた。

また、深く感動を覚えたのはやはり自然の壮大さである。普段から生活をしている現地の人々からしてみれば何気ない風景なのだろうが、異国の地を感じさせるその光景には惹きつけられた。今でもありありと脳内に焼き付いている。

(2) 協力できること・したいこと

私は今回の滞在を通じて、ホストファミリーによる支えの大きさを強く感じた。このことから、来年度アウグスブルクから青年使節団が来日する際には、可能ならホストファミリーとして団員の受け入れに協力したい。食文化の面でも、普段から洋食に親しんでいる日本人がドイツへ行くことはそれほどハードルの高いことではなかったが、独自の発展を遂げてきた和食に慣れていないドイツの団員にとっては、日本での食事が大きなハードルになるかもしれない。一度ホームステイを経験した身としても、団員に寄り添い、快適な生活をサポートできるよう努めたい。

さらに、滞在中のプログラムにおいて、通訳・案内としても協力したいと考える。実際に長浜で暮らす人間として、その魅力を自分の口で伝えたいと考えたからだ。黒壁スクエアや竹生島、琵琶湖の風景など、わたしの好きな長浜の一面をぜひ知ってほしい。

(3) 実現に向けて自分ができること・今後の取り組み

とはいえ、私の英語力はまだまだ未熟である。大学では第 2 外国語としてドイツ語を選択していることもあるし、英語とドイツ語、両方を学習し、来年来てくれる団員たちにとって言語の壁がコミュニケーションを阻害することがないようにしたい。

また、今回の滞在でお世話になったホストファミリーとの交流についても、これからも絶やさず続

馬渕さんの情報が前述されていないため、補足情報を取り入れるとよいと思います。

けていきたい。ドイツ滞在前、馬渕さんのお宅を訪問した際「国と国との平和は人と人との平和から成り立つもの」とおっしゃっていたことが印象深い。地道なことではあるが、遠くにいても心を通わせ続けることがこれからの姉妹都市提携を豊かにする一助となるのかもしれない。

６．おわりに

プログラム全体を通して、非常に有意義な体験をすることができたと感じる。観光目的で訪れていたならば知りえなかったであろう歴史や知識、そして素敵な人々に出会えたのは、かけがえのないことである。最後にはなるが、滞在をこれほど価値あるものにするために全力を尽くしてくださったホストファミリー、アウグスブルク市職員の皆様、そして長浜市職員の皆様に感謝を伝えたい。そして、これからは私自身も姉妹都市提携をより実りあるものにするため、できることをしていきたいと思う。